木曽御嶽山

濁河川・兵衛谷（上半部）

（材木滝～稜線）

メンバー：三井（L、記録）、志満、後藤、斉藤

遡行日：10年9月11日～12日

「兵衛谷」は世評通り、変化に富んだ名渓だった。しかし、前回、我々はその名渓の全てを味わい尽す事なく、流程の中間部にある「材木滝」からエスケープせざるを得なかった。それは如何にも悔いの残る事で、「来年の今、同じメンバーで上半部をやろう。」と誓い合った。

ところがそれから数日後、志満さんから「来年上半部をやるなら余韻の残っている今のうち、来週末にでも行きませんか。」とのメール。

僕も志満さんと数年越しで狙っていた沢、完全遡行を果たしたい気持ちに変わりはない。幸い、他のメンバーも都合がつく。で、今回の沢の計画が決まる。

前回同様、「飛騨小坂」の道の駅で前泊。翌朝濁河温泉に車を走らせ、温泉の市営駐車場に車を止めると「兵衛谷」パート2がスタートする。

遊歩道を材木滝に向かって下って行くと、容易に落ち口の上にでる。その先には5m、7mの滝がかかり、共に左岸から巻く。

普通、入渓直後は動きに硬さというか若干のぎごちなさがあるものだが、それが何だか昨日材木滝に泊まって、今日は3日目の遡行をしているような連続感すらあって順調だ。

材木滝から上の沢は意外と細めの流れで、巨瀑が何本も存在する沢のようには思えない。

暫く進むと沢に丸太を組んだ橋がかかっているが、これは濁河温泉から来る遊歩道だろう。2条3mの滝を越えると突然、目の前に工事中の橋が現れ驚く。かなりがっしりした橋で、林道を開削しているようで「こんな所になぜ？」と疑問と同時に腹立たしい気分。

沢は暫く何もない平瀬だが、それが浅い船底のような形状となり、その側壁をへつるように遡って行く。途中で数人の釣師と出会う。挨拶をして先行させてもらう。暫く行くとまた釣師が。

濁河温泉から容易に入渓できるせいか釣師が多いようだ。

暫くは小滝まじりの平瀬が続く。2条6mの滝を越えると二俣となり、巨瀑が出現する。

左俣が「しん谷」で、40mの豪快な大滝（パノラマ滝）が懸かり、右俣にも30mの大滝が懸かって、息を呑むような光景が広がっている。

滝や辺りの岩壁は石灰華（温泉の成分）というのだろうか、黄色味がかっていて不気味な感じ。しばしこの圧倒的な光景に見入ってしまう。

我々の進むのは左俣（しん谷）で、右岸側にしっかりした巻き道がある。

赤テープや一部ロープが付けられたりしている。ここでちょっと気をつけたい出来事が…。

僕は最後尾で、少し離れて登り始めたのだが、巻き道は明瞭なのだが何故か先行に追いつかない。笛を吹いても

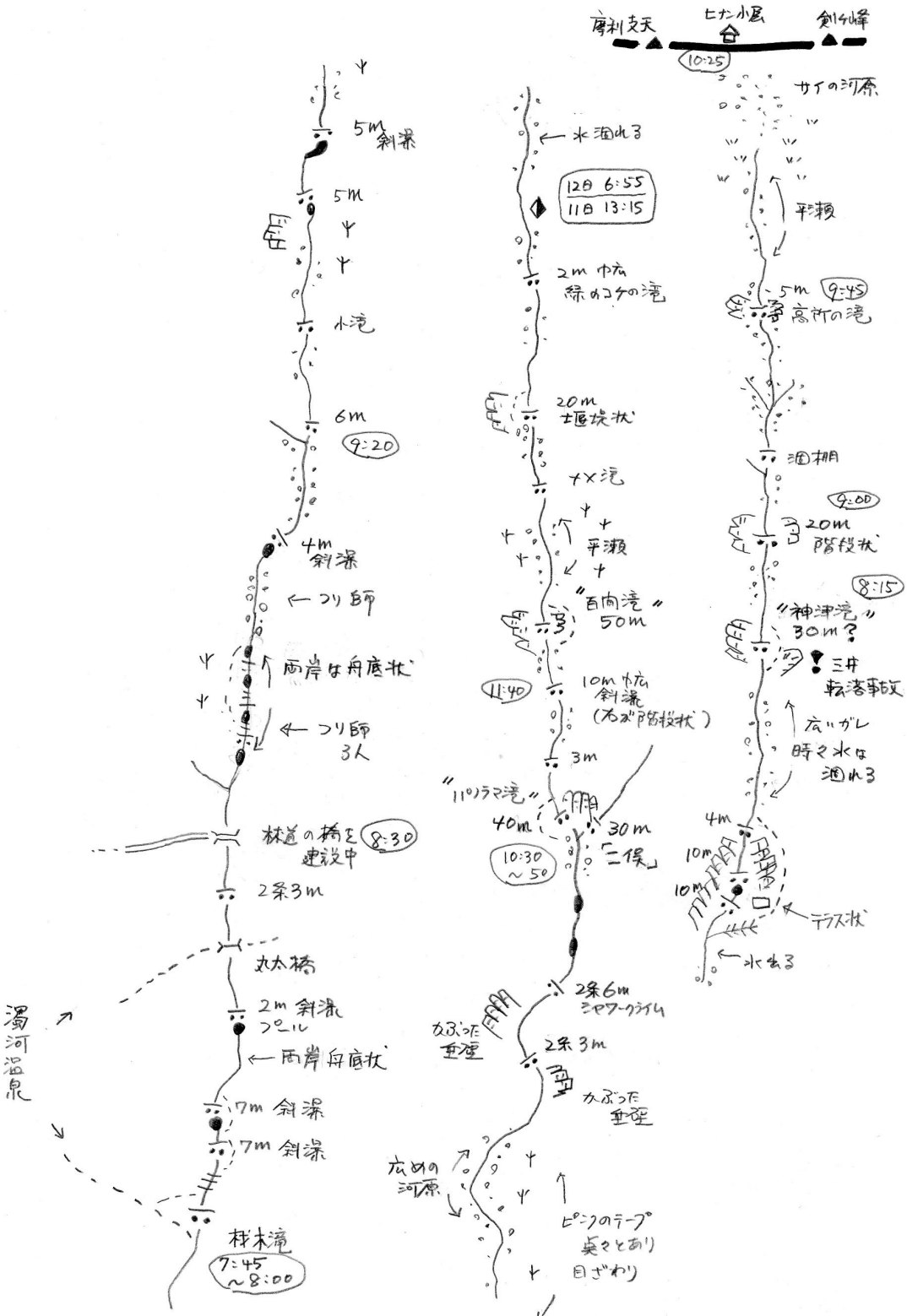
応答がない。いくらなんでもそんなに離れるハズはない。とすると先行は巻き道の途中の不明瞭な所から沢に降りているのではないか。そう考えて沢床を見下ろす地点で様子をみていると3人がやってきた。「やっぱりね。」と思ったが、こういう時にヘタに動くとお互い行き違ってしまい、厄介な事になる事がある。源頭のツメの藪漕ぎなどでも同様の事があるし、後続の確認とか注意が必要だね。
10mの幅広の斜瀑を右から快適に登ると、今度は 50mの巨瀑(百間滝)。これもすごい。
兵衛谷の上半部は大滝が連続するが、殆ど直瀑の登れそうもない滝ばかりだ。只、巻き道は何れもしっかりついている。ここは左岸を巻く。
いったん平瀬となるがその先に 20mの堰堤状の滝。右岸から垂壁のきわをトラバースして落ち口にでる。
緑のコケで覆われたような小滝を越え、「さて、今日のテン場は何処にしようか。」
時間的にはまだ早いし、先に進んでもいいのだが、地形図やトポをみるとこれから先、いいテン場は得られそうにない。
ダメ元で先に進むか、今いる所はイマイチだが整地すれば何とかなりそうなのでここにするか。
迷いどころだが先に進んで無かったら悲劇だ。明日は時間的には余裕がある。
「ここにしよう。」
ツエルトを張り、流木を拾い集める。
早々に焚き火を始めてくつろぐ。テン場でこんなに時間的にゆとりのもてるのは久し振りな気がする。
1泊程度で人数が多いと食当ばかりに負担がかかるので、今回は食当を決めずに各自用意という事にした。
焚き火を囲みながら話に興ずる。充実した一日だった。

[第二日目]
歩きだすと直に沢の水が涸れてしまう。(水はこのあと、出たり涸れたりするのだけれど。)
間もなくゴルジュとなり手のつかない直瀑が落ちている。左岸から巻くといったんテラス状となり、その上にまた細い直瀑があって、廻りは垂壁に囲まれていて中々凄い光景だ。
巻き上がると沢は広いガレとなり、徐々に傾斜も増してくる。
その中に忽然と大滝が現れるが「神津滝」と呼ばれる大滝で、落差は 30mはありそう。(記録によっては 50mとも書かれている。)
左岸のガレルンゼから高巻いたのだがここで僕がちょっとした事故を起こす。(ちょっと、と書いたが勿論、一歩間違えれば大事故になった訳で…。)
高巻きの途中で露岩の横に枯れた木があり、何気なくその枯れ枝を掴んでしまった。
何の抵抗もなくその枝は折れ、バランスを崩して僕は一回転して 3m位だろうか、転落した。幸い身体にダメージはなく、ただこめかみの上辺りを何かで切り、少し出血しただけで済んだ。
ひと目で枯れ木と判るものだったし、ホールドにするつもりなどなかったのに、何故掴んだのか自分でもわからない。軽率という他はない。
まー、これも気を引き締めて登るよう

に、という神様のちょっとした警告というか戒めであろう。
いつの間にか辺りはガスに包まれはじめ、余計荒涼とした雰囲気が増す。
ガレ沢をつめて行くと赤茶けた、いかにも脆そうな岩壁のゴルジュの中に20mの滝。水流の右から登って行くが階段状で、ノーザイルで問題はない。
先はガレが広がって、沢というよりもガレ場とでもいったらいいか。
そのガレ沢に 5m程の滝。日本最高所の滝とも言われているものだ。
左から酷いガレを登って巻く。ガレの間の細い沢形を忠実に追っていくが傾斜は落ち、両岸も笹の混じった草原状となる。それが間もなく石の敷き詰められたようなだだっ広い所にでる。
「賽の河原」と呼ばれている所だ。信仰の山らしく抹香臭い地名になっているが、盛夏の頃はお花畑になっているらしい。
生憎、すっぽりとガスに包まれて、離れると先行者が見えなくなるほど。晴れていれば御嶽山の山頂部が間近に見えるはずだが…と、思いながら歩を進めて行くと、急にガスが吹き払われたように流れ、山頂部が姿を見せ始めた。
思わず歓声があがる。右に見えるのは剣が峰で、左は魔利支天だろうか。その間には避難小屋も見える。
僅かな登りでその避難小屋に到着。中で沢の装備を外し、ズックに履き替え、十分腹ごしらえをしたところで下山にかかる。
素晴らしい沢だった。その満足感に浸りながら、信仰の山らしい整備された登山道を濁河温泉に向かってゆっくりと下っていった。

＊　＊　＊　＊

漸く念願の「兵衛谷」を遡行する事が出来た。
心ならずも下半部と上半部に分けての遡行になってしまったが勿論、本来は２泊３日で出合いから稜線まで一気に遡行するのが望ましい事は言うまでもない。
その点で、間を置かずに上半部を遡行したのは正解だったと思う。
いずれにしても文句なし、世評通りの名渓だと思う。
会員の皆さんにも是非入渓をお勧めしたい。



10年9月11日～12日
濁河川／兵衛谷上半部